



その想い



第1号

発行人：谷泰智

平成27年6月7日発行

★ 寺報発行にあたって

檀信徒皆様、改めまして護国寺住職の谷泰智です。早いもので先代住職の祖父が亡くなり早9年が経つ頃となりました。私は平成19年春に本山の修行から戻りました。住職を継いでからこれまでの日々、各檀家さんに支えられ、地域の方々に助けられながら、御陰様でアジャリ本堂改築という一大事を経て、振り返れば8年の月日が過ぎておりました。昨年には阿闍梨としての伝法を授かり、ようやく僧侶としての形だけは整ったように感じております。

そんな拙僧が前々から憂いておりましたが、現代仏教の力不足です。その原因は、私も含めた僧侶全体の活動が、本来の『良く生きるための仏教』から、葬儀や埋葬に関わる儀礼的な慣習へと、重きを置いてしまっている事にあるのではないかと思います。そんな状況を少しでも変えるべく、この度より、定期的に寺報を発行していくことに致しました。寺報とは、つまり寺からの便りのようなものです。まずは年2回（盆前と暮れ）に全檀信徒皆様のもとへ配布させていただきます。この寺報は5つの構成になっております。

- 一、時事、季節、随想などを交えた住職からの挨拶
- 二、法事や日々のお祀りに関する供養のあれこれ
- 三、檀家さんそれぞれが、御先祖様、お仕事、ご家族に向かう其の想い
- 四、お経の内容を紹介し、少しでも現代生活に役立ててもらえるような法話
- 五、行事のお知らせや、ご質問への回答など

何分、学の浅い私の知識や、憚りながらの法話ですが、回を重ねることで少しづつ向上していくつもりです。また、行事のお知らせでは新たな企画もあれこれと練っております。

この寺報が、皆様それぞれの大切な『その想い』をより深め、より弘めていく為の一助となれる事を願っております。



護国寺の宗派は本山修驗宗（天台系）です。本堂の御本尊は不動明王です。毎月28日は護摩を焚いています。



奈良県山上ヶ岳（標高1719M）の平等岩で。自分の手足だけが頼りです。（怖）

★ 住職 谷泰智 挨拶

先月31歳になりました。ふと、「人はなぜ誕生日を祝っているんやろ？」という強引な疑問について考えてみたりました。一般的に我々は、老若男女家族友人の誕生日をお祝いします。私はそこに二つの意味を見出します。ひとつには、一年365日の中で今日というその日が誕生日だから「365分の今日やね！」というお祝い。ふたつには、今まで丸〇〇年生きてこれたことへのお祝い・・・。

どちらかというと、我々はひとつめの方のお祝いに偏りがちではないでしょうか。いついつはあの人の誕生日やからとプレゼントを考えてワクワクしたり（頭を悩ませたり？）、また小さいお子さんはあと何日で誕生日や～！と指を数えて待ち遠しかったり。どうしてもその365分の1の日に拘ってしまいます。けれども改めて考えてみると、その1日に拘るよりも、誕生日の辺りから見渡して、その人が今まで頑張って歩いてきたその事実をお祝いすることのほうが、より素敵に感じるのは私だけでしょうか。

お年を召した方には誕生日を厭われることもあるかもしれません、良いこと嫌なこと全部丸呑みで、とにかく歩いて生きてきたことをお祝いする、そんな日が1年のうち1日は、きっと必要なんじゃないかと思います。そして若い世代の方々にも同じように、生きてきて今存在している唯そのことに思いを馳せ、自分を祝って欲しいのです。さらには不思議を持って欲しいのです。

不思議とは、疑問に思うということではなく、「ようわからんけど・・・なんか凄くない！？」と言えるような、純粋で素直な喜びだと思います。

時は金なり、とはよく言いますが「時は命なり」、とある坊さんは言いました。そしてその命は、『ひとり一宇宙』の不思議で大切な物・・・。きっと365分の1より凄いことだと私は思っています。

★ 回りて向かう～供養のあれこれ～



追善法要、回忌法要、追善回向など、これらはつまり法事のことです。とりわけ回向（えこう）という言葉は、普段日常生活で耳にすることはないと思われます。善なる行いが回りまわって向かっていく、という意味ですが、法事に限らず、存命の方の為に人知れず善行を為すことなども立派な回向と言えます。

日本の仏教では身近な方が亡くなると、通夜葬儀が営まれ、遺体は荼毘に付されても尚、故人を偲んで回向を行います。この回向は、主な趣旨としては故人の為に、近親者が集い営まれるものですが、それだけでは無いのです。亡き故人をさながら鏡の如くして、そこへ向かう想いがまた反転して生ける近親者のもとへと回り向かうこと。それも回向の大変な側面なのです。できるうることならば、その反転の光ともいえるものを、ごく自然で素朴な感謝の想いへと変えていくことが素晴らしいことではないでしょうか。

それでは、回向の第一歩としての善行とはなんなのでしょうか？ それは第一に清め、第二に供物、第三に法事、というこうとになります。

まず、清めとは掃除のことです。ご家庭のお仏壇、祭壇、お墓などの、御靈を迎える場所を清めるという当たり前のことですが、自分の経験上から申しましても、水拭きされ物の配置が整った道場には善い空気が引き締まっているものです。無理がいかず、できる範囲で心がけたいものです。

次に供物ですが、これはには菓子、果物、生花、本膳などが含まれます。種類はなんでも構いません。故人様の好きだったものや季節の旬のものをお供えするのがもっとも好ましいと思います。ただし、本膳だけは精進料理で仕上げていたとき、もし魚やお肉をお供えする場合は、別のお皿に盛り付けるのが良いでしょう。故人様がまだ四十九日を迎えていない場合、それらの肉魚はなるべく四十九日法要が終わってからの方が伝統的ではあります。

肉魚のお供えと聞くと不殺生はどうなるのか？、と疑問があるかと思いますが、これについてはまた改めてお話します。

最後に肝心の法事ですが、現代でこそ掃除やら供物やらお飾りやら読経までをも全部含めて法事と呼んでいますが、本来の法事とは字の如く、法の事、つまり仏法に触れる事を意味します。故人ゆかりの親族、友人が集まったうえで、様々な仏の教え（古の高僧によるものも含まれます）を僧侶が代表で唱え、会衆全員がその教えを心に念じて、故人の遺徳を讃え冥福を祈り、亡き故人に会えない悲しみを癒し、命の尊さを再度胸に刻み、残された者たちでより良き未来に向かって歩みだす、それを確かめ合うひとつの機会なのです。

ひとりの儀礼が終わればあとは無礼講、思い出話で盛り上がり、生者同士の絆を深め合う、良いお酒の場となっても一向に構わないのです。

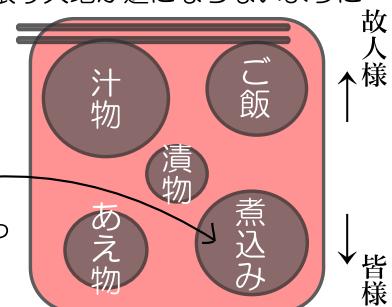
と、お解りのように法事にしても葬儀にしても、あくまでも主役はそれを営む人であり、僧侶ではないのです。と言いつつも、法事の場では故人様の生前の想いを胸に浮かべ、少しでもお釈迦様の教えを啓発していくことが、私の役目であり、私が精進すべきことだと重く受け止めております。



飾り付け例

できましたら、遺影が祭壇の中央にあり、かつその下にお位牌、本膳、お供え、さらに経机、香炉それらすべてが一直線に並ぶのが理想です。お位牌でお顔が隠れる場合、位牌を向かって右にずらします。お供えの果物は、できる限り天地が逆にならないようにします。

煮込み椀が一番平べつたいです。



★ 檀家さんに聞く



日高村のさんさん市に『森下恒雄』さんの名前が入ったトマトが売られています。実は、この方はもう亡くなっています。敢えてその名前が付けられているその想いを、皆さんにご紹介します。

森 下さん
坊 住職

森 仕事しながらでごめんねえ。

坊 いえいえ、もうほんと立ち話で結構です。今日は宜しくお願ひします。
さっそくですけど、時期的には今がすごい忙しいですかね？

森 うん、あのね～植えたらずーと忙しい。(笑)

坊 年間何回位植え替えするんですか？

森 1回。8月の15日頃に植えたら、来年の7月まで、ずーと採ります。ここで植えたががずっと向こうまで一本仕立てで、5M～7M、蛇の道みたいに。

坊 そんなに伸びるがですか！(驚)。ひとつ苗から何個ぐらい取れます？

森 年にもよるけど、これが1段よね・・・、これに2個3個ついて・・・、3個ついたら理想よねえ。
3個で10段取れたらえいねー。ひと箱30個やきね。その年によっても出来が違うし、季節によっても単価が違うけど。



坊 品種は決まってますか？

森 今はね、桃太郎。日高村はほとんど桃太郎系で、なかでも改良系のファイトっていうのを接ぎ木で植えゆうね。桃太郎が美味しいけど病気に弱いのよ。それでファイトっていう改良系が作られちゅう。それでも去年の大暴雨みたいに浸かってしもうたら病気がでるので接ぎ木をせんと作れんなっちゃう。

坊 たとえ災害が無いとしても、毎年予定通り行くもんじゃないがですねえ。

森 そう、季節によっても違うし、毎年違う。主人がまだ勤めに行きゆう時分に、お婆ちゃんが病気で倒れてから手伝い始めたんやけど、もう30年になるねえ。鍬も鎌も持ったことが無かったき、鎌は石にバンバン当てて欠けてしまうし、鍬は変に力が入るき柄がすっぽり抜けてしもうたりの、そればあのもんから始めたがやけどねえ。

日高村はトマトの一大産地で、歴史も50年ぐらいになるきねえ。主に都会へ出荷しよった頃はバブルの影響もあってひと箱8000円～1万円もする高価な値で売れる時代もあったねえ。それがもういかんない、そこからは京都の西京極の市場とか、大手のスーパーなんかに出すようになって、県内でもサニーマートとかにはうちが最初に出すようになったねえ。
お爺ちゃんと私の写真を載せてねえ。

坊 今でこそ誰々さんが作った果物とかのパッケージがありますけど。

森 そう、その当時はまだ地産地消とかも言われてない時代やったきねえ。

坊 今でもね、ほら、森下さんのトマト、森下恒雄さんってお爺さんの名前で出しちゅうでしょ。

森 お爺ちゃんが頑張って作ってくれよったきね、お爺ちゃんの名前を無くしどうのうてねえ。

まあ、うちのお爺さんは真面目でねえ、しんどいとかうるさいとか一言も言わんとねえ、いつも手伝うとくれたきねえ。ほんとに有難いことで八十過ぎても亡くなる直前まで働いてくれた・・・。

坊 トマトを作っていくことがお爺さんへの供養にもなりゆがですねえ。

森 そう、お爺さんとお婆さん2人で一生懸命作りよったきねえ。どこ行くのも2人一緒でねえ。

坊 それにしても1本の苗から1年間ずっとトマトがなり続けるって凄いですね。

森 うん、そういうように管理するのが大変ながよ。(笑) 例えば温度が高かったら、傷とかスジヒキができる見えた目も悪くなるきねえ。

坊 そうながですかあー。僕はスジ引いちゅうほうがより美味しく見えよったです。(笑)

森 農協の出荷場へ出すには見た目はもちろん、中の糖度もセンサーでちゃんとわかるき、ほんとに厳選されたトマトしかシガーグーの名前がつかんがよ。高知では徳谷のシガーグーも有名やけど、日高の農協は特に厳しいがよ。

坊 凄いですね、勝手にシガートマトとは言えんがですね。

森 昔は、関西関東へ何回も行って、試食直売会に出してもろうて、何年もかけてやっとシガートマトが浸透しだいで、それで今の単価をつけて頂いたがよ。県下で一番最初にシガートマトをやりだしたのも日高やしね。



坊 年中大変な作業やと思いますが、どんな時が一番嬉しいですか？

森 うーん、「今年は糖度がなかなか上がらん、どうしよう・・・」と思いついた時に、「今年も美味しいトマト送ってくれてありがとう！」って言うてもううたった時が一番嬉しかったねえ。

「ああ、一生懸命つくりよって良かったあ。」て、ほんとに思えるねえ。
・・・こんな話でよかったです？(笑)

坊 良いお話を聞けました。どうもお忙しい中、有難うございました。



お経のことば



「わたしには子がある。わたしには財がある」と思つて、愚かな者は悩む。

しかしすでに自己が自分のものではない。ましてどうして子が自分のものであろうか。

どうして財が自分のものであろうか。

もしも愚者がみづから愚であると考えれば、すなわち賢者である。

思うに執着とは、最も厄介な煩惱です。物への執着は言わずもがな、愛する人に囚われることは、愛情の裏返しではありますが、時に一方通行が過ぎると、最悪その関係がこじれきってしまうこともあります。実際、私の師匠も「人間行（じんかんぎょう）こそが最も困難な修行です。」と常々仰っていました。

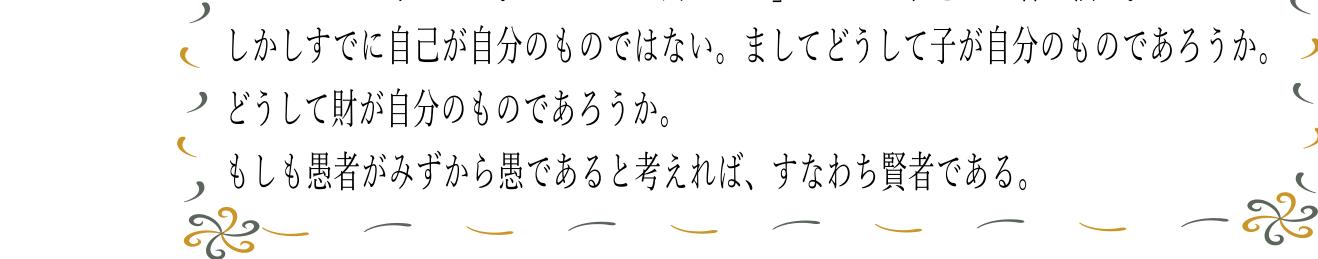
上に示したお経は、法句経の名で知られるダンマパダ第5章の62節と63節です。このお経は日本の僧侶が法事などの場で唱えるお経ではありませんが、お釈迦様が入滅されて数百年の間にまとめられた、いわゆる原始経典の一部です。そのためお釈迦様の肉声にかなり近い内容であると言われています。この二つの節には、溢れかえった物質に埋没する我々現代人が、日ごろ囚われがちな自己に関しての鋭い考察が含まれています。

読まれると大抵の方が『自己が自分のものではない』という部分につまずかれるようです。勿論私もそうですが、当たり前に前に、人はそれぞれ自己があると思っています。しかし、お釈迦様の仰るこの自己とは実は『心』のことなのです。結論から言うと『心の中に自分がある』というのが仏教の基本的な思想です。心とは皆さんのが胸に手を当てて思うところのまさにその心です。普通誰もが自分の中に心があると思っていますが、仏教ではその逆なのです。

仮に想像してみてほしいのですが、「今日一日起きてから寝るまで常に良い気分でいよう！」と心に決めるとして、果たして何人の人にそれが可能でしょうか。つまり我々の心は自分の意志ではどうにもできない周りの世界に、皮膚よりも敏感に接しているのです。もっと正確にいえば繋がっているのです。

その証拠に、良いこと悪いことに応じて、心は嬉しくなり悲しくなります。そういうわけでお釈迦様は、確かな心という言い方をされません、しかし、何かしらの『善なる確かな意志』については大いにこれを褒め称えています。穏やかな日も嵐の日もあって悩んで当たり前、しかし意志までもがその心に流されてはいけないよ、ということです。

人や物に対しての執着はあれこれと移ろうものだけれど、そのことを素直に受け止めて、確かな意志をもち、ひとつ高い視点から愚者である自己を見つめる・・・。それができる人こそが賢者である。そんな謙虚な姿勢を大事にしたいものです



思うに執着とは、最も厄介な煩惱です。物への執着は言わずもがな、愛する人に囚われることは、愛情の裏返しではありますが、時に一方通行が過ぎると、最悪その関係がこじれきてしまうこともあります。実際、私の師匠も「人間行（じんかんぎょう）こそが最も困難な修行です。」と常々仰っていました。

上に示したお経は、法句経の名で知られるダンマパダ第5章の62節と63節です。このお経は日本の僧侶が法事などの場で唱えるお経ではありませんが、お釈迦様が入滅されて数百年の間にまとめられた、いわゆる原始経典の一部です。そのためお釈迦様の肉声にかなり近い内容であると言われています。この二つの節には、溢れかえった物質に埋没する我々現代人が、日ごろ囚われがちな自己に関しての鋭い考察が含まれています。

読まれると大抵の方が『自己が自分のものではない』という部分につまずかれるようです。勿論私もそうですが、当たり前に前に、人はそれぞれ自己があると思っています。しかし、お釈迦様の仰るこの自己とは実は『心』のことなのです。結論から言うと『心の中に自分がある』というのが仏教の基本的な思想です。心とは皆さんのが胸に手を当てて思うところのまさにその心です。普通誰もが自分の中に心があると思っていますが、仏教ではその逆なのです。

仮に想像してみてほしいのですが、「今日一日起きてから寝るまで常に良い気分でいよう！」と心に決めるとして、果たして何人の人にそれが可能でしょうか。つまり我々の心は自分の意志ではどうにもできない周りの世界に、皮膚よりも敏感に接しているのです。もっと正確にいえば繋がっているのです。

その証拠に、良いこと悪いことに応じて、心は嬉しくなり悲しくなります。そういうわけでお釈迦様は、確かな心という言い方をされません、しかし、何かしらの『善なる確かな意志』については大いにこれを褒め称えています。穏やかな日も嵐の日もあって悩んで当たり前、しかし意志までもがその心に流されてはいけないよ、ということです。

人や物に対しての執着はあれこれと移ろうものだけれど、そのことを素直に受け止めて、確かな意志をもち、ひとつ高い視点から愚者である自己を見つめる・・・。それができる人こそが賢者である。そんな謙虚な姿勢を大事にしたいものです



● 9月23日水曜日 秋の彼岸会と千体流し供養 ヒガンエ

午後3時から本堂にて

● 秋頃（詳細未定） 山中ヨーガ

大瀧山の頂上にて、自然の中でヨーガをします。

● 毎月28日 柱源護摩供 ハシラモトゴマク

本堂の護摩壇で炎を上げて祈祷と供養をしています。
午前9時と午後3時の2回です。

※葬儀が重なると変更される場合があります。ご了承下さい。

護国寺

781-2155

高知県高岡郡日高村九頭291

✉ 0889-24-7244

仏事についてのお悩み、ご質問、
行事に関するお問い合わせ等、
お気軽にお電話ください。

